

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00092

研究課題名(和文)近代日本における暦の流通と仏教・神道・陰陽道の展開に関する宗教社会史的研究

研究課題名(英文)A Socio-historical Study of Religion on the Circulation of Calendars and the Development of Buddhism, Shintoism, and Onmyodo in Modern Japan.

研究代表者

岡田 正彦 (Masahiko, Okada)

天理大学・人間学部・教授

研究者番号：00309519

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：2018年には、日本宗教学会・第77回学術大会において「暦を通して宗教史を語りなおす」と題するパネル発表(代表者：林淳、岡田正彦・下村育世は発表者)を行ない、2019年の日本宗教学会・第78回学術大会では、「近代における暦・国家・宗教」と題するパネル発表(代表者：岡田正彦、林淳・下村育世は発表者)を企画して、どちらも高い評価を受けた。しかし、2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大のために、最終年度に予定していた海外の学会での研究発表や調査活動は中止を余儀なくされた。このため、2年間科研の申請期間を延長し、2022年度末に研究報告書を刊行するかたちで研究活動に区切りをつけることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

暦を通して近代日本の宗教・文化・社会の変動を総合的に理解するという、従来の日本宗教史ではあまり取り上げられてこなかったテーマに切り込むことによって、新たな知見を得られたばかりでなく、宗教学の枠組みを超えた多方面の研究者との交流が深まった。また、科研の調査を通して各地の暦関係者や寺社の関係者たちのつながりがつくり、今後の研究の進展を展望できる環境が整ってきた。本科研のメンバーを中心にした研究プロジェクトは現在も継続中であり、今後の研究のひろがり期待できるようになったことが、この科研の最大の研究成果だと考えている。

研究成果の概要(英文)：In 2018, a panel titled "Retelling the History of Religion through the Calendar" (represented by Makoto Hayashi, Masahiko Okada, and Ikuyo Shimomura as presenters) was held at the 77th Annual Conference of the Japanese Association for Religious Studies, and a panel titled "The Calendar, State, and Religion in Modern Japan" (represented by Masahiko Okada, Makoto Hayashi, and Ikuyo Shimomura as presenters) was organized at the 78th Annual Conference of the Japanese Association for Religious Studies in 2019. The panel presentation was highly acclaimed at the Conference in 2019. However, due to the spread of the new coronavirus in FY2020, research presentations at overseas conferences and survey activities scheduled for the final year of the project had to be canceled. For this reason, we were able to extend the period of the Grant-in-Aid for Scientific Research for two years and bring our research activities to a close with the publication of a research report at the end of FY2022.

研究分野：宗教学 思想史

キーワード：仏暦 神宮暦 皇紀 暦政策と宗教 貞享暦 須弥山儀 神宮大麻 明治改暦

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成26～28年度に採択された、科研基盤研究(C)「近世日本における暦学の展開と暦の流通に関する宗教社会史的研究」(研究代表者：林淳、研究分担者：岡田正彦、梅田千尋)を継承しながら、研究分野をより特定して、陰陽道、仏暦、官暦の専門研究者がこれまでの研究を発展させるとともに、近世から近代にかけての暦と宗教の関係について、より総合的な視座から検討することを目指すものであった。

また、新たな研究分担者の下村育世は、すでに前述の科研の研究協力者として参加しており、並行して若手研究(B)「宗教政策の面から見た明治期日本の暦の歴史」(研究代表者：下村育世、平成28～30年度)に取り組んでいた。こうした背景から、本研究の着想が醸成されるようになった。

明治期の頒暦制度の変遷は、近世から近代にかけての宗教と国家の関係を考察するうえで、極めて示唆に富む史実に溢れている。明治の初頭に、一度は幕府の天文方から編暦・頒暦の権限が土御門家に移されたが、これはすぐにはく奪されて、陰陽師の身分は廃止されることになる。さらには、新たに設置された大学において伝統的な学知とは決別した編暦を行ない、新政府の権威のもとで暦を頒布する体制が確立された。こうした一連の動向は、同時期の廃仏毀釈とならんで、明治初期の文化政策・宗教政策の特色を色濃く反映する史実の一つであると言えるだろう。

明治期の宗教・文化・社会の変動を「暦」の変遷から総合的に再考するために、仏暦、陰陽道、官暦の専門家が共同調査を実施して、近代日本の宗教史、文化史、社会史に一石を投じることを目指したことが、研究開始当初の背景であった。

### 2. 研究の目的

科研の代表者及び分担者が、個々に目指していた研究の到達目標は、以下のようなものであった。

まず、研究代表者である岡田正彦は、大日本仏暦会社から刊行された「仏暦一斑」の周辺史料を発掘し、近世以来の仏教天文学の知的系譜と仏暦の頒布活動の歴史にこの暦を位置づけて、これまで未解明の仏暦の歴史を明らかにすることを目指した。具体的には、「仏暦一斑」の記載事項を精査する一方で、仏暦一斑以前と以後の仏暦の調査を進めて、仏暦関係史料のデータベース化を進めた。また、岡田は近世以来の仏教天文学の研究を進めるなかで、須弥山儀と呼ばれる精密機械に関心を寄せてきた。同時期に地動説を人々に理解させることを目的として、西洋で製造されたオーラリーに対抗して、和時計の技術を駆使して製造された須弥山儀類については、現存する儀器の調査を行ない、すでに研究成果を発表している。このプロジェクトでは、現役の時計技術者と連携しながら、現存する須弥山儀のより詳細な調査を行ない、須弥山儀の動作を解析する報告書を作成した。

研究分担者の林淳は、天社神道廃止令が出された理由は陰陽師の身分廃止だけではなく、政府に編暦を取り返す目的もあったとして、幕末維新期から明治改暦までの陰陽道の動向について、より深く掘り下げて解明していくことを目指した。また、渋川春海「日本長暦」から、中根元圭「皇和通暦」、平田篤胤「天朝無窮暦」へと継承された思想の系譜についても考察した。律令時代に中国の暦法が受容されたが、それ以前に日本には古暦法があると考えたのは、渋川であった。その基本的な考え方は、中根、平田にも継承されている。仏教天文学の創設者である円通の「仏国曆象編」にも、こうした思考法は影響を及ぼしている可能性がある。渋川春海の研究を中心に、近世から近代にかけての多彩な暦学書を読み解き、仏教と神道と陰陽道の複雑な関係について、暦を通して考えていくことを目指した。

もう一人の研究分担者である下村育世は、これまで法制度のレベルから検討してきた近代日本の暦の歴史について、政府にとっての暦の位置づけの問題と「官暦」に与えられた正統性の問題に焦点を絞って考察した。官暦が明治16年から終戦まで神宮大麻とともに神宮から頒布され続け、大麻にかかわる言説がしばしば暦にも言及していることは、暦と国家神道との関連を推測させるものといえる。これらの言説の推移を検討することで、暦と国家神道の関連、また国民生活レベルでの日本型政教分離について考察した。これらに加えて、国立公文書館の所収史料をもとに進めてきた官暦関係の情報の収集とデータベース化については、この研究プロジェクトでも継続した。

こうした個別の研究に加えて、岡田と林は、各地の図書館や仏暦関係寺院、陰陽道関係施設における史料調査と文献目録の作成を行ない、下村は国立公文書館を中心にした官暦関係の情報の収集とデータ化を継続する。そして、最終年度には個々の調査結果を統合して、近代日本における暦の流通と仏教・神道・陰陽道の展開に関する文献・資料を整理し、最終年度のシンポジウムの成果とともに研究報告書に記載して公開することを目指した。

### 3. 研究の方法

研究分担者の一人である林淳は、近世・近代の陰陽道研究のパイオニアであり、自著『近世陰陽道の研究』(2005年)の研究を発展させて、明治期の暦と陰陽道の関係を明らかにす

ることを目指した。

また、自著『忘れられた仏教天文学』（2010）の刊行以来、明治期の仏教天文学の動向を調査してきた研究代表者の岡田正彦は、陰陽道や官暦との関連を意識しながら仏暦を研究することによって、近代日本宗教史の新たな研究分野を開拓しようと試みた。明治5年末の改暦と太陽暦の導入以来、頒暦商社にゆだねられていた暦の頒布の権限は、明治16年の暦から神宮司庁の独占となり、一般の暦師による本暦・略本暦の頒布は制限されることになる。その一方で、明治16年版と17年版の「仏暦一斑」が、仏教天文学の知的系譜に連なる暦師たち（大日本仏暦会社）によって編纂・刊行された。この「仏暦一斑」の刊行に結実するような、近世以来の仏暦の系譜と明治以後の仏暦の展開を辿ることは、近代日本仏教史や文化史の知られざる側面を発掘し、この時期の神道と仏教の関係について、従来の研究とは異なる視座から考察していくことを可能にするだろう。

さらには、下村育世の研究する官暦の制定と神宮大麻を伴う暦の頒布体制が成立する過程は、そのまま国家神道体制／日本型政教関係の成立・展開過程と重なっている。近代日本の暦の通史を宗教史とともに辿ることは、近代日本の政教関係の新しい研究につながるだろう。とくに神宮大麻とともに広く頒布される官暦は、基本的に神社祭祀を中心にした年中行事を国民に意識させる役割を担っており、先に指摘した陰陽道や仏暦との対比関係に注目しながら、官暦の頒暦（暦の頒布）と編暦（暦の編纂）の所管の変遷を追うことは、近代の神社神道史ばかりでなく、日本の近代史に新たな知見を提供することになる。

こうした、高い専門性を備えた個別の調査やデータを共通の問題意識と融合させることによって、近代日本における宗教、文化、社会の変容を総合的に把握することが、本科研の基本的な研究視座であった。個々の研究分野では、それぞれに独自の研究成果を発表している研究分担者が、学会でのパネル発表や研究調査を共同で実施することによって、暦研究及び宗教研究の相乗効果を期待した。結果的には、予期された以上の研究成果が得られたと思う。

#### 4. 研究成果

初年の2018年度には、各研究分担者の個別の研究成果の公表に加えて、日本宗教学会・第77回学術大会において、当科研の代表者・分担者を中心に「暦を通して宗教史を語りなおす」と題するパネル発表を企画した。各自の発表タイトルは、「渋川春海『日本長暦』の影響」（林 淳／愛知学院大）、「梵暦運動と宿曜道・仏暦 - 暦から見る近代仏教史 -」（岡田 正彦／天理大）、「近代における編暦と頒暦」（下村 育世／東洋大）であった。

個々の研究成果としては、林 淳は『日本史リブレット人 渋川春海』（山川出版社、2018年11月25日）の刊行や東海寺（品川区）の渋川家の墓地調査、会津若松市立図書館の保科正之と暦関係の資料閲覧、などを行った。下村育世は、行政文書を中心として近代の暦に関わる政策や制度の動向を通時的に把握し、一般の人々に暦を頒布していた頒布従事者等の動向や各地の頒布方法を掴む調査を行なった。代表者の岡田正彦は、研究協力者とともに東京のセイコー博物館や江戸東京博物館などの調査を行ない、とくに田中久重の製作した須弥山儀と視実等象儀に関する未公開の史料を発掘することができた。

続く2019年度には、各研究分担者の個別の研究成果の公表に加えて、日本宗教学会・第78回学術大会において、当科研の代表者・分担者を中心に「近代における暦・国家・宗教」と題するパネル発表を企画した。各自の発表タイトルは、「近代における皇紀の成立」（林 淳／愛知学院大）、「明治改暦再考」（下村 育世／東洋大）、「国民の祝祭日と仏教の忌日 『仏暦一斑』と『神宮暦』」（岡田 正彦／天理大）、「近代中国における暦政策と旧暦」（謝 荔／上智大学）であった。コメントータは、中牧 弘允（国立民族学博物館名誉教授・吹田市立博物館館長）が担当した。

個々の研究成果としては、林 淳は「渋川春海と貞享改暦」（日本カレンダー暦文化振興協会講演・8月31日）などの講演活動のほか、奈良市吉川家文書の史料調査や渋川家関係の調査を行なった。下村育世は「昭和戦中期の暦 暦と大麻の頒布強制と頒暦数の急伸」『高崎経済大学論集』（第62巻第1号、2019年6月、72-104頁）を発表した。また、暦文教ミニフォーラムでの講演（2019年4月）のほか、群馬県立公文書館や茨城県立歴史館での行政文書の調査を行なった。代表者の岡田正彦は、ドイツ・ハイデルブルク大学での招待研究発表（Buddhist Astronomy and Buddhist Science in 19th Century Japan、2020年2月14日）などのほかに、研究協力者とともに熊本市の「時計の大橋」及び熊本市立熊本博物館において、田中久重の製作した視実等象儀の実物調査を行ない、これまで確認されていない貴重な事実を発掘することができた。

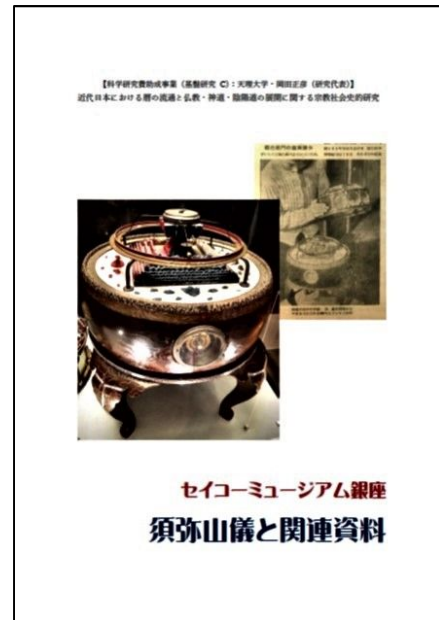
最終年度の予定であった2020年度には、夏に開催される予定であった国際宗教史宗教学会（ニュージーランド）にCalendar and Religion in Japanese Tradition: Buddhism, Shinto, and Onmyodo.と題するパネルを科研メンバーとともに申込み、発表を受理されて渡航準備をしていたが、コロナ禍のために大会自体の開催が中止になった。また、最終年度に予定していたシンポジウムや博物館でのイベントなどもすべて中止せざるを得ない状況であった。

このため、3年間の予定であった科研の申請期間の1年延長を申請して受理されたが、コロナ禍の状況は好転せず、2021年度及び2022年度まで研究期間を延長することになった。

この間にも科研のメンバーはそれぞれに研究活動を継続し、本科研と並行して2020年度から基盤研究(C)「近世近代移行期における暦学と仏教・神道・陰陽道」(代表者・下村育世、分担者・林淳、岡田正彦)に採択され、日本宗教学会のパネル発表や出版等の研究成果公開を継続している。

2022年度は、コロナ禍のために自粛していた研究出張等をようやく再開することができるようになった。繰り越した科研費をもとに、2022年7月にはセイコーミュージアム銀座(東京)へ研究協力者とともに再度調査へ赴き、2023年1月には国会図書館の文献調査も再開した。さらには、海外での活動も再開し、シカゴ大学東アジア研究センター・沼田財団共催の「Interpreting Japan Interpreting Buddhism」(2022年10月18日)において研究代表者の岡田が研究発表を行なった。タイトルは「Buddhist Science in 19th Century and Modern Buddhism in Japan.」であった(招待発表)。

また、2023年2月に本科研の研究成果の一部として、報告書(『セイコーミュージアム銀座 須弥山儀と関連資料』)を刊行した。主にセイコーミュージアム銀座の資料を紹介しているが、科研の期間に調査した全国の須弥山儀の所在状況などを詳しく紹介している。度重なる感染拡大のために、企画していたシンポジウムやイベントなどは再びキャンセルせざるを得なかったが、この報告書をまとめることで一応の研究成果を残すことができた。印刷・製本等の費用には繰り越した科研費を充当し、適切に研究費を運用することができた。



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 下村育世	4. 巻 第228集
2. 論文標題 明治改暦におけるグレゴリオ暦をめぐる問題 日本らしい暦とは何か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 501-517頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡田正彦	4. 巻 2月号
2. 論文標題 日本の暦と仏教の深い関係を再認識するために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊住職	6. 最初と最後の頁 84-93頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田正彦	4. 巻 3月号
2. 論文標題 日本の暦と仏教の深い関係を再認識するために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊住職	6. 最初と最後の頁 116-123頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下村育世	4. 巻 第62巻第1号
2. 論文標題 「昭和戦中期の暦 暦と大麻の頒布強制と頒暦数の急伸」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『高崎経済大学論集』	6. 最初と最後の頁 74 - 104頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岡田正彦
2. 発表標題 仏暦の忌日と「日本仏教」 仏教国としての近代日本という言説
3. 学会等名 日本宗教学会・第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡田正彦
2. 発表標題 19世紀の日本における仏教天文学と仏教科学
3. 学会等名 「科学研究費助成事業 学術変革領域研究（B）中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合」の公開研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田正彦
2. 発表標題 「国民の祝祭日と仏教の忌日 『仏暦一斑』と『神宮暦』」
3. 学会等名 日本宗教学会 第78回学術大会（パネル「近代における暦・国家・宗教」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 淳
2. 発表標題 「近代における皇紀の成立」
3. 学会等名 日本宗教学会 第78回学術大会（パネル「近代における暦・国家・宗教」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 下村 育世
2. 発表標題 明治改曆再考
3. 学会等名 日本宗教学会 第78回学術大会(パネル「近代における曆・国家・宗教」)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田正彦
2. 発表標題 Buddhist Astronomy and Buddhist Science in 19th Century Japan.
3. 学会等名 February Heidelberg workshop, "Japanese Buddhism and the Modern Natural Sciences" (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡田正彦
2. 発表標題 梵曆運動と宿曜道・仏曆 - 曆から見る近代仏教史 -
3. 学会等名 日本宗教学会・第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林 淳
2. 発表標題 洪川春海『日本長曆』の影響
3. 学会等名 日本宗教学会・第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下村 育世
2. 発表標題 近代における編暦と頒暦
3. 学会等名 日本宗教学会・第77回学術大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	下村 育世  (Shimomura Ikuyo)  (00723173)	一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師(ジュニアフェロー)   (12613)	
研究分担者	林 淳  (Hayashi Makoto)  (90156456)	愛知学院大学・文学部・教授   (33902)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------